（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	堀川聡司
論文題目	精神分析における昇華理論の探求―天才論から喪の作業へ―		

（論文内容の要旨）

本論文は、精神分析の創始者 Freud, S.が心理学的意味を新たに付与した用語「昇華」の諸相を探究し、臨床実践考察での有用性という新たな視座から提示したものである。

昇華とは、「性的なエネルギー（リビドー）を本来の目標ではない、社会的・文化的に価値あるものに変換すること」を意味する。Freud, S.本人が昇華を正面から取り上げなかったこともあり、この用語には、概念としての複雑さや曖昧さが歴史的に付きまとっていた。さらに Freud, S.以後の精神分析世界においても、「欲動」の視点が衰退するに従い、昇華という用語の重要性は、理論・臨床の両面において減じる方向へと進んでいる。しかるに本研究は、昇華に内在している曖昧な点や使用する者の間で生じている齟齬を整理し理論面を考察する文献研究と、心理療法の経験を昇華理論の視点から考察する臨床実践研究を通して本題に取り組んでいる。

本研究の構成は、問題を提起する序章に始まり、第一部「昇華理論の展開」、第二部「昇華理論の批判的検討」、第三部「昇華理論の臨床的応用性」という三つの主題で論を展開し、終章にてそれらを総括する形式をとる。

第一部「昇華理論の展開」では、精神分析史に展開された昇華理論を俯瞰し、その語られ方の変容を批判的に精査している。第一章では Freud, S.の昇華理論を時代的変遷と包含する主題や文脈から検討し、Freud, S.の昇華理論には概して(i)脱性化と(ii)社会化の二要素が存在することを明らかにした。Freud, S.以後の昇華理論を取り上げる第二章では、現代の三大潮流である米国自我心理学、英国対象関係論、フランス精神分析での昇華理論を歴史的に検討している。第二部「昇華理論の批判的検討」において筆者は、臨床的応用性が見込まれる昇華理論は Klein, M.の「償い」と Dolto, F.の「象徴産出的去勢」の二理論であることを明示する。その上で Lacan, J.の＜物＞に関する議論を参照し、昇華には、「人間に運命づけられた原初的な満足の喪失が身体ベースで内在している」という事実が密接に関わっており、その点において、昇華が対象関係や内的空想という枠組みだけでは回収されえないことを強調する。

第三部「昇華理論の臨床的応用性」では先述の昇華理論が臨床実践の考察にどのように寄与しうるのかを論者自身の臨床素材をもとに検討する。それに際しては微細な視点と巨視的な視点という両視座から捉え議論を進めている。論者は昇華をもたらす「象徴産出的去勢」が、精神分析的心理療法の治療技法へと置換されうることを示し、象徴産出的去勢は昇華理論の二つの側面、代替満足と象徴化とに密接に関わっていることを指摘している。さらに論者の精神分析的心理療法の 2 事例が提示され、喪の作業としての昇華を提示するとともに、偽りの昇華を識別している。

終章「天才論から喪の作業へ」では、Freud, S.が提示した天才論としての昇華が、時代と共に失墜した要因を、「理論的な必然性」と「Freud, S.の夢」の断絶の二点に見出している。その上で、代替満足、象徴化、＜物＞の再建という、三つの要素で構成される昇華理論を携えることが臨床実践の考察に有益であることを指摘する。最後に、昇華を一種の純粋形態として想定する本研究の研究態度を省察し、本研究の限界点と更なる可能性に言及した。結論として、昇華を精神分析の営みの到達点を見直す一つの試金石と位置づける。精神分析がその到達点を絶えず批判的に再検討する営為であることを踏まえれば、昇華理論は極めて精神分析的なものであると論者は結論づける。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は精神分析の創始者 Freud, S.が創生した論争的な概念のひとつである「昇華」を精神分析的心理療法実践の視座から批判的に検討し、その概念の理論的改変を探求するに止まらず、心理療法臨床における今日的有用性を提示したところに創造的な意義が認められる。昇華概念はややもすると、社会的価値観のもとに日常用語として使用されがちなのだが、論者はあくまで精神分析的臨床実践の視座に定位し論考を進めている。その結果論者は、幾多の凡庸な結論を退ける独創的な見解を提示するに至っている。

Freud,は「脱性化」と「社会化」を主要素として昇華の概念を構築し、昇華の担い手を天才に見た。そこに理論的曖昧さと Freud 自身の葛藤が内包されていることを論者は論理的思考に基づき鋭敏に指摘し、それらの問題点を踏えつつ、Freud 以後の精神分析における昇華理論を細心に吟味する。そこでは網羅的に展望することはせず、臨床実践考察での有用性という問題意識のもとに検討している。その探究から昇華理論としての Klein, M.の「償い」と Dolto, F.の「象徴産出的去勢」を抽出し精査する。その検索を経て、Klein,と Lacan, J.の思考を精密に吟味する過程を通して昇華理論の再構築を試み、代替満足、象徴化、＜物＞の再建の 3 要素の重要性を提示している。これら 3 要素の選択的認識によって、個人の内界での「心的発達・成熟」と「現実生活での適応・外部からの評価」という外界の価値観の両者を双眼視できる交差点としての昇華という、昇華の精神分析理論における存在意義と臨床的有用性の両者を浮かび上がらせることに見事に成功している。理論的な脆弱性を強みに反転させたこの新たな昇華概念の導入によって既成の精神分析理論や概念を超えようとする野心的な試みであり、ここに至って論者は独創的な立脚点に到達している。

続いて論者は臨床家本来の姿勢として自らの定義した昇華を論者自身の精神分析的臨床 3 事例での検証を試みている。そこでは「象徴産出的去勢」が、精神分析的心理療法の今日的技法に内包されており、昇華を現実化させる技法であることを例証している。さらに「喪の作業としての昇華」についても同様の検討を行い、そこから失われた根源的母親すなわち＜物＞の再建を実行しない「偽りの昇華」としての「肛門期的再建」や「男根期的再建」が認められるという極めて斬新な臨床知見を提出している。

論者は、Freud, S.によって創生された天才論としての昇華は影を潜め、喪の作業としての昇華こそが有益に機能すると結論づける。「昇華とは、精神分析の目標のひとつである」と主張する論者は、昇華に関する論考を深化させながら、絶対的な存在を絶えず批判的に検討し直す営みとしての精神分析臨床の本質から目を逸らさず、理論の知的検討に終わらない謙虚な姿勢を著述全体を通して貫いているが、その姿勢は高く評価されねばならない。

試問では論者の的確な応答を通して論者の主張がより明確になるとともに、昇華概念の本質に関わる課題も指摘された。しかしながらそれらの点は本論文の更なる発展の可能性を含意するものであり、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 27 年 2 月 18 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、（公開期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降